

フランスにおける近代体育史像の形成について
—『方法論争』の成立とクーベルタン研究の発展によって—

清 水 重 勇

(高知大学教育学部)

Formation des idées d'histoire des activités physiques chez les éducateurs physiques français dans leur description historique, — la réalisation de la “Guerre des méthodes” et son influence sur l'estimation des oeuvres de Pierre de Coubertin.

Shigeo SHIMIZU,

(Faculté de Pédagogie, Univ. de Kôchi)

SOMMAIRE

L'histoire est le “rappel de solutions qui furent celles du passé et donc qui ne sauraient être en aucun cas celles du présent. Mais bien comprendre en quoi le passé diffère du présent, quelle école de souplesse pour l'homme nourri d'histoire”. J. Thibault, en citant ces mots de Lucien Febvre, examine le problème fondamental de l'enseignement d'histoire. Il affirme la possibilité de contribution de l'historien, à la fois praticiens, des activités physiques à une réflexion historique synthétique.

Etant face à face du problème de l'efficacité de l'enseignement d'histoire et de ses liens au cadre de formation des éducateurs physiques, nous étions invités à une réflexion sur le passé de l'histoire et des historiens.

Nous bornons principalement de réfléchir, d'abord, sur la description historique de praticiens, en la cherchant dans les articles d'Amoros, Laisné, Paz, Mamoz, et Hillairet. Ce dernier, en dépit de non-praticien, nous n'hésitons pas lui mettre en rôle dans notre contexte. C'est lui, pensons nous, qui rédigeait la connaissance officielle de l'histoire générale de la gymnastique.

Les aperçus historiques apparus de 1815 à 1889 forment une évolution d'un “rétrospection de la vie consacrée à la gymnastique” à une “histoire institutive” et officielle de la gymnastique. Le caractère rétrospectif demeure, néanmoins, dans l'histoire de gymnastique, mais cette évolution subsiste dans le berceau des théoriciens d'exercices physiques.

Ce fut toujours la méthode dans laquelle ils intéressaient, et ce ne fut pas de réflexion historique mais d'une propagation de méthode. Tissié, Coubertin, Demeny et enfin Hébert, ils intervinrent inévitablement dans un débat en faveur de la réforme de l'éducation physique. Nous mettons accent sur le fait que c'était eux qui en donnaient le caractère parfois combatif et bien délicat dans leur description, aussi que c'était dans ce terrain où la “guerre des méthodes” (Le Boulch) prenait racine. D'où porte, considérons nous, un premier fruit de la formation des idées d'histoire des activités physiques chez les éducateurs physiques français.

Ce phénomène de la préoccupation des méthodes occasionna une réinterprétation historique de l'évolution des méthodes françaises. Il nous importe du travail de Pierre de Coubertin. Son histoire du sport dans le “Notes sur l'éducation publique” (1909) présenta premièrement une perspective plus ou moins anthropologique de l'histoire des activités physiques, examinant une éclosion de “l'instinct sportif” à travers les âges.

Nous abordons, ensuite, de la réflexions sur les travaux contemporains qui relatent des oeuvres de Pierre de Coubertin, pour y tracer un développement et une conséquence d'un élément qui va former des idées d'histoire sous le biais de la guerre des méthodes.

Parmis les nombreux auteurs de 1924 à 1975, nous pouvons consulter: G. Bourdon, M. Bergeron, K. H. van Schagen, B. Gillet, G. Meyer, P. Boulogne, M. Th. Eyquem, J. Meynaud, M. Bouet, J. Thibault, J. Ulmann, et en dépassant la nationalité française, C. Diem, E. Weber.

Nous concluons en résumé que le prolongement de l'influence de la guerre des méthodes dans l'estimation des oeuvres de P. de Coubertin ne se termine que jusqu'envers 1960, à l'indice que subsiste une tentative d'en réestimer pour la patrie de ce [personne à côté d'une dominante estimation à l'intérêt du mouvement international des Jeux Olympique. Voici, se pousse dès 1960 une tendance nouvelle qui se manifeste de surmonter le joug de nationalisme, produit contradictoirement de coubertinisme ou d'internationalisme sportif.

Les problèmes mondiaux du sport ne se traduisent plus à celui des méthodes. En conséquence, ils exigent un entendement historique en même temps spécifiques [que total. La vocation de l'historien des activités physiques ne sera négligé dans l'ensemble des études professionnelles des éducateurs physiques sous prétexte qu'elle ne corresponde pas à un intérêt pratique.

I はじめに

体育・スポーツ人の歴史認識は如何なる発達を辿ってきたか。この疑問はひとえに教員養成課程における体育・スポーツの歴史教育の現状から生ずる。フランスにおける体育史研究の発展が、この疑問にひとつの現代的解答を与えてくれるように思われる。今日、わが国では、体育史の再解釈あるいは書き替えが行われようとしている。すなわち、従来、体操と呼ばれ、学校教育の中で主要な座を占めていた教材の変遷や、その歴史的意義を問うことを主な使命としてきた体育史、いかえれば体操教授史を、国民の各層、各年令段階を対象とするところの生涯体育・スポーツの成立と展開に関する叙述、いかえればスポーツ史へと書き替えることである。学校教育の中に閉じこめられていた体育を広く国民大衆の体育として解放しようとする実践的要求の反映であろう。

本稿は、こうした現代的動向に対し、直接かかわるのではなく、これを近代体育の克服をめざす動向と捉えなおし、近代体育史の再解釈の過程の一点に焦点を合わせてゆくことにより、現代日本における実践的問題の指摘にかえる。

とはいえ、近代体育史の再解釈の過程の全体像を描くという仕事は、きわめて広範囲に及ぶ大規模な文献研究を必要とする。おそらくこの仕事は、多数の専門的研究者の積極的協力なしには達成されないであろう。本稿はこの限界を認めた上で、フランスにおけるクーベルタンなる人物の業績評価をめぐって、冒頭に掲げた疑問を考察しようとする。クーベルタン研究を取り上げることの妥当性をあらかじめ示すならば、それはこの人物こそ、フランスの体育史叙述の趨勢を19世紀末において変える業績を残したとの仮説にもとづくのである。

本論は、19世紀末に至る体育史叙述の変遷を概観する部分Ⅱと、クーベルタン研究の発展を跡づける部分Ⅲに分かれる。

とりあげた文献は、これまで上梓された体育史の通史、問題史、クーベルタンに関する独立した論文、あるいは体育評論などである。できるだけ多くの文献を扱うよう考慮したが、第二次大戦前の雑誌論文は取りあげることができなかった。

本稿においては、現代の慣例にならって身体活動ないし身体訓練に関する歴史的研究を総称して、「体育史」と呼ぶ。「体育」の包摂する領域（実践の内容と実践者）は時代とともに変わる。今日では、この意味をこめて「体育・スポーツ」という語も用いられる。体操史、体操教授史、学校体育史、社会体育史、スポーツ史などを体育史に含まれる概念として用いた。Gymnastique は体育と訳されるようになってきたが本稿では、あえてこの傾向を慎み、体操と訳すことで、スポーツとの対照を際立たせるようつとめた。

Ⅱ 『方法論争』の成立

1. 以下に概観するのは、組織的体育実践にたずさわったフランスの体育家が、果して自己の体

育実践や理論をどのような歴史的過程として捉えてきたか、またその発達の過程はどのような結果を生んだか、という問題である。この意味で、組織的体育実践の成立する19世紀初頭から体育家の体育史認識を調べる。もとより、剣術、水泳、乗馬、舞踊など古くから存在する個々のスポーツの変遷や発達を調べた学者はいたのであるが、彼等はここでは取り上げない。

まず最初は、王政復古の時代にフランスの体育を確立したアモロス (1770~1848)⁽¹⁾ を取り上げよう。彼はフランス国民の体力と道徳の向上に資する体育の方法を考案し、政府に体育への関心を促した人物である。彼の考案がどのような影響のもとで生まれたかという点について、後の体育史家は、ドイツのヤーンの方法と比較して論ずることになるのであるが、彼自身はそのことにはまったく触れていない。唯一人直接彼の方法の基礎を提供したのはペスタロッチであると述べている。この初代の体育家は、比ぶべき者なき彼の方法を理論的に開陳するに当って、産業の発達、経済、政治の動向、教育思想家の思想、体力や健康の状態、汎愛主義の思想、軍隊の動向、家庭の母の実態、諸外国の教育上の新発明など、自らの方法の正当性を示すあらゆる過去の事実を列挙している。一般的な歴史観は、「啓蒙主義」であると自ら述べている⁽²⁾。しかし、方法を考案する彼の思考過程は表明されていない。ただし、彼は生涯を通じて自らの実践の成果の記録を怠りなく集めている⁽³⁾。彼がフランスにおいて行なった活動の成功と失敗の記録、これが体育家の体育史研究の歴史の第一ページであるといつてよかろう。理想化した過去のあれこれの事実の上に、正当なる自己の理論を位置づける。そして、自らの業績を自らの手によって編纂するという作業が初代の体育家の仕事だったのである。

アモロスの教えを受けた二代目の体育家は、アモロスの伝承と批判による回顧的叙述を残している。レスネ (1810~1896) はアモロスの方法を学校教育に適するよう改良した人物であるが、彼は体育辞典の編纂を試みる。過去の諸知識の集大成をめざすところの一種の歴史史料編纂と評価してよいのだが、実際のところは184ページの用語辞典におわっている⁽⁴⁾。しかし、著者はこの出版に当って「これが不十分なものであることは承知している。わたしの力の及ぶものではないことを隠しはしない。しかし、これまでこの種の出版がまったく行われていないと考え、出版を決意した。わたしのこの本が不完全ではありながら、多くの識者によりよいものをつくろうと決意させることを望む……。」⁽⁵⁾と、きわめて虚心にも使命感あふれる述懐をしている点に、客観的事実認識の可能性を見ないわけにはいかない。

ところで、この高令の体育家もまた自己の生涯の回顧によって、現状の改善を訴えるという方法をとっている。彼は、過去半世紀アモロスなき後の軍人養成の一課程へと傾斜していった体育を振り返って、曲芸的で度胸のいる、両親や子供の恐れる体育を批判し、体育普及は体育指導者の養成機関の確立にありと訴え、ルイ・ル・グラン校における34年間の指導体験を延々とつらねている⁽⁶⁾。

体育家が体育の普及・振興を願って自己の体験を告白することは、それ自体非歴史的思考であるとはいえないが、自己の体験の対象化を当事者の感性的レベルに閉じ込めてしまうとすれば、それは単なるエピソードでしかない。仮にレスネが1880年代の現代人として語っているととしても、あるいはまた彼は実践家であり、歴史家でなかったとしても、彼が直面している課題をより一層明晰に示してくれるものは、自己の課題の過去への投影であり、過去における問題解決の苦心の過程であり、事実の必然的生起の過程の認識である。

このことは、レスネ一代の体育家あるいは指導者としての授業改造過程にも関わってくる。しかし、これは本稿の枠外におく。

勿論、1880年の現代人に未来からの非難を投げつけることは慎まなければならない。そうではなくて、自己の属する国の体育の過去を振り返える一つの現場的类型を示したいのである。本稿で

は、これを称して「体育家一代の回顧録」とする。

体育家の手になる体育史の先駆は、みなこのような類型に属するのであろうか。別のタイプの体育史的思想を持つ体育家もいた。

2. レスネの言葉にもかかわらず、体育の史料編纂の仕事がこれより一年前に日の目を見ている。バスの「フランス体育史史料」⁽⁷⁾がそれである。著者はすでに1865年「体育による身心の健康、太古より現代にいたる身体訓練の研究」⁽⁸⁾と題する体育史を著わしていた。すくなくとも、学校体育の実践が1869年以前にさほど顕著な発達を示していたとはいえないフランスで、こうした体育史が実践家の手で出版されていることは注目しなければならないであろう。しかし、バスの編纂した「史料」というのは、彼が1868年結成した「フランス体操協会」⁽⁹⁾の過去13年間の所収記事の整理を指していたのである。

バスの仕事は、われわれの期待にそう程のものではない。やはり、そこには依然として自己の実践記録に近いものを史料と名づける感覚が拭われていない。1865年出版の体育史が彼の独自の研究の借用（体操協会はドイツの影響関係が強かった）であるといっていよい。しかし、バスの「史料」はレスネの指導記録と同列に置かれてはならない。というのは、彼自身こうした仕事が将来の体育史研究に役立つのであり、客観的な体育史を書くためには、まず史料の獲得が大切だと述べており⁽¹⁰⁾、彼の言葉通り、やがて10年後にマモは、この史料をもとにして、「19世紀フランス体育史」⁽¹¹⁾を書き上げるからである。

マモもまた体育の実践家であり、彼においてフランスにおける、一つの体育史の確立を見ることがのできるのであるが、これについて述べる前に、もう一つの体育史の公刊のいきさつについて触れておこう。

レスネの辞典編纂よりはやく、1869年、パリの医師の手になる報告書が学校体育の義務化と整備のための法案作成委員会から出されていた。報告者イエレは、この報告書の半ばを費して体育制度と思想の発展に関する歴史的叙述を行った⁽¹²⁾。支那とギリシアの古代体育を概観して、中世に触れずメルクリアリスの体育書を古代と近世のかけ橋として評価し、フランスとドイツの医学者の運動論の貢献にふれながら、ラプレー、ルター、モンテーニュからバゼドウ、ベスタロッチの業績に移り、近代体育の成立過程とグーツムーツの運動の展開を述べる。この近代体育の第一段階について、ナハテガル、リング、ヤーン、クリアス、アモロスの体育実践に詳説を加え、第三段階の現代の状況をオーストリー、ドイツ、スイス、スウェーデン、フランス、オランダ、ベルギー、ノルウェー、スペインの国別制度比較、統計的比率によって描く。イギリスに関する紹介は、60年代のものとして特に注目できるし、今日われわれが手にする世界体育史通史の叙述の大部分がすでにこの報告書の中に著わされている点に注目しなければならない。

イエレが何をもとにしてこの通史を書き上げたか、出典の明確でない報告書であるだけに興味深い。近世を教育思想と医学者の学説で説明し、次にグーツムーツにはじまる国民体育の発展を描くという文脈は、おそらく、バスあるいはドイツのヴェスマンスドルフの「学校体操教授史」⁽¹³⁾の借用かと推察される。

1880年代において、フランスには二つの体育史叙述が存在した。一つは学校体育制度化のための官側の体育史であり、もう一つは社会体育の組織化をめざす民間の側からの体操協会史である。そして、これら二つの体育史の傍らには、もっぱら知的関心から著わされた遊戯史があった⁽¹⁴⁾。身体訓練ないし身体活動の歴史に関する研究は、ここから20世紀に向けて、相互に緊密な関係を保ちながら次第に発展してゆく。その歩みの第一歩は先に述べた1891年のマモの研究である。以下にすこし詳しく著者の所説をまとめてみる。

フランス体操協会の先駆者の業績評価と、フランス国民の形成に偉大な貢献をなし遂げた体操協

会の発展の過程を以って体育史を書いている。前史として、革命時代のフランス民族の力強さと、それにつぐ王政復古及び第二帝政時代の民族衰退現象の危機が語られる。人口増加率の低落、結婚、出産数の減少、平均身長減少、壮丁体力の下降などの諸徴表を統計資料にもとづいて披露する。(p.7; 10—23) 第一帝政下、民衆も上流階級も健全な生活を送っていたが、第二帝政下に上流階級は腐敗した生活を送り、下層民衆は麻薬、アルコールに毒されて道徳的頹廢に陥ると描く。その原因の一つに徴兵年限の漸減(1815～32年: 9年, 1832～72: 7年, 1872～90: 5年, 1890～: 3年)を挙げる。(p.19) 学校体育が発展せず、仇敵ドイツの国民体育隆盛で危険がせまっていると語る。(p.26～7) ヤーン、アモロス、クリアスの業績が評価される。19世紀におけるドイツ、ベルギー、スイスにおける体操団体の発達を示したのち、フランスにおける立ち遅れが指摘される。1852年の陸軍体育師範学校創立以降のフランス体育の流れをアモロスの弟子たち、ダルジー、レスネの活動を中心に描き、アモロスの教えを地方都市に伝えた人々(パリ市のレスネ、パスコー、ヴェルニュ)(p.56～7) リヨンのピュジャン、ランス市のドフランソワ、(p.58～9)の功績を報告する。ラ・ロシュルとロシュフォールの著名な一族ジュリアン家、ボワティエのクストノーブル親子、(p.60) といった目新しい人物も紹介している。

学校体育義務化の過程を1845年(サルヴァンディ)、1854年(フォルトゥール)、1869年(デュリュイ)の三段階で捉え、これに継続して、1868年以降の社会体育組織としての体操クラブの創立と拡大が協会史として描かれる。史料についての配慮、組織内部の分裂・統合などが比較的客観的に取り扱われており、学校体育でもスポーツでもない体操という分野が、諸外国の団体との接触を保ちつつ開拓されてゆくありさまを述べる。

一体、歴史の客観的叙述とは何か。これは歴史学上の根本的問題である。マモの体育史は、すくなくともそれ以前の体育史よりも過去を捉える態度において、一步進んでいるといえる。「体育家一代の回顧録」から抜け出て、事実生起の過程をより一層長い尺度で語ろうとしている。また体操協会の草創と量的拡大、質的变化が一つの文脈によって表現されている。もしかりに、マモが彼にとっての現代、すなわち19世紀末のフランスの状況を、今日のわれわれのように捉えることが出来たとしたならば、彼の体育史はさらに一步前進したであろう。

3. 19世紀末は、フランスの体育がマモの描くような体操協会の発展に彩られていたのであろうか。共和国政府は、フランス国民の体育組織を体操協会にのみ依存しようとしていなかった。イギリススポーツ教育やスウェーデン体操への関心はきわめて高く、民間においてもクーベルタン、グルッセらは前者を、デムニーやティシェは後者を優れたものと評価していた。

マモの描いた体育史は、フランス体操協会発達史といってもよからう。それはやがて、20世紀の到来とともに他の二つの体育史、すなわちクーベルタンのスポーツ史とティシェの体育史と三つ巴の関係を織りなすことになる。大ざっぱにいうと、体操協会中心の体育史の立場は、アモロス以来の伝統的な(器械体操を含む)体操によって国民の育成を行おうとする立場であり、クーベルタンの立場はイギリスのエリートを育成する方法として、かくれもない成果をあげているスポーツ教育によって国民を育成しようとする立場、そしてティシェの立場は、スウェーデン体操の理論に基づく合理的な体操によって国民を鍛えようとする立場であると、いってよからう。

これら三つの立場は、それぞれ民間に活動の基盤を有し、国がこれらの諸方法のどれによって学校体育をすすめてゆくかという点で、互いに覇をきそうことになる。

ル・ブル教授は、1961年この状況を指して、「方法論争」と呼ぶ⁽¹⁵⁾。本稿も以下この用語に従う。

さて、他の二つの立場からどのような体育史が描かれるであろうか。次に20世紀初頭に著わされたいくつかの体育史研究を紹介してゆこう。

スポーツや遊戯に関する歴史的研究は、先に述べたとおり、体育家の関心をあまり惹いていなかった。1900年に著わされたヴェイエの「遊戯と喜び」⁽¹⁶⁾は主として絵画的関心から公刊されたものであり、1901年のジュスランの「古いフランスにおけるスポーツと遊戯運動」⁽¹⁷⁾もまた、英国文学史研究者のフランス語彙に関する研究である。いずれにしても、この当時、知識人や好事家の間にこうしたスポーツへの関心が高まっていたことを示すものである。特にジュスランは後に述べるように、ブルドン、クーベルタンと共に1894年、ソルボンヌ大学講堂でフランススポーツ史の講演を行っていたのである。彼は上記の著書の中で、スポーツという語はスポーツ活動とともに、もともとフランスの生み出したものであることを示そうとつとめている。

ジュスランは、主として中世・近世のフランス人の生活の中でスポーツがいかなる意味を持っていたかという角度で彼の体育史を描く。特に20世紀初頭、フランスでスポーツが流行しているけれども、これはイギリスの流行のまね事ではなく、先祖たちの流行の再来なのだ指摘し、先祖たちの生活が現代フランス人といかに異なっており、スポーツの実践はかれらにとってどれ程生活の必要から生じているのかと、ユスタス・デ・シャン、フロアサール、チョーサらの詩句を引き、絵画や版画を挿入しながら描くあたり、体育家による従来 of 体育史叙述と異なる筆致である。

イエレ、パス、マモらの描く体操史が、現代体操界興隆に至る切れ目ない発達過程であったのに比べて、ジュスランの描くスポーツ史は、過去を一旦現代から切り離し、そこに生きた人々の個性的な営みとしてスポーツ活動を浮き彫りにすることによって、歴史個体としての一つの世界を描こうとしている。

ジュスランのスポーツ史と同じ年に、クーベルタンは「公教育ノート」の中で「スポーツ史、通史」の一章を発表した⁽¹⁸⁾。彼の描くスポーツ史を以下にまとめてみよう。

スポーツの興隆が青少年の教育に及ぼす影響は無視できない。教育改革を考える者は、体育・スポーツの発生について認識すべきである。スポーツ競技の発生は文明史とともに古く、実目的を有していたといわれているが、ギリシア競技の10世紀にわたる歴史は、この概念では包摂しえない。(p.130~1) そこで体育・スポーツ史を「スポーツ本能」という概念で再解釈してみよう。

(p.132) ギリシア人にとって、スポーツは一種の健全な趣味であり、スポーツを趣味とする本能が集団的に存在し、ギリシア文明の発展と継承を支えていた。(p.133~4) これに対して、ローマにおけるスポーツ本能は市民全体に横溢していなかった。中世における騎士運動は初期において、スポーツ本能のあらわれであったが、やがて、貴族制度の確立とともにスポーツ禁止がはじまる。

(p.136~7) また、キリスト教も十字軍の時代には身体訓練を認めていたが、十字軍の終了とともに禁欲と瞑想の世界をつくり上げ、ヨーロッパ人の肉体を弱めてゆく。(p.138~140) ルネッサンス人文主義者達は、身体陶冶を主張したが、実行に移さず、18世紀中期にはスポーツ本能は死滅に瀕していた。(p.140~1) ドイツの各地方では、騎士学校が身体訓練をわずかに行っており、ルソーの教えを実行に移したのはドイツの汎愛派教育家たちであった。しかし、これも十分な成果をあげていない。(p.141) 革命期末期に、パリにおいて、オリンピック競技が行われたが短命に終わる。イギリスにも、知的学習と同等に剣術を教えよとの主張があったけれども(p.142)、これらすべての努力はスポーツ本能を呼び起こすにはいたらなかった。(p.143) この時代には軍事的関心が優勢で、スポーツ実践への関心は皆無であった。(p.143) 19世紀初頭には、イギリスにもスポーツ競技復興の兆しはなかった。(p.145) しかし、やがて筋肉キリスト教徒とケンブリッジ・オックスフォードの対校試合が起こり、ここにトーマス・アーノルドのスポーツ教育の実践が始まる。(p.146) イギリスのスポーツ教育は国外へはなかなか伝わらず、(p.148) ドイツ、スウェーデンには独特の体育が発達していた。これがスポーツの進出を妨げたと考えられがちであるが、この二国がスポーツ導入の先鞭をつけた。(p.149) スポーツは、やがて欧米各国に広まり、近代

オリンピックの復興が達成された。(p.150~1)

以上が、クーベルタンの描くスポーツ史である。

体育家の体育史は、クーベルタンのきわめて大胆なスポーツ史の叙述によって発展したといってもよいであろうか。この叙述の実証的な妥当性は、ここでは問わない。われわれは、クーベルタンのスポーツ史が、「方法論争」のバイアスとナショナリズムの背景の中で書かれたことを認めなければならない。歴史の叙述を歴史貫通的な法則によって描き、歴史の発展法則を証明することは、歴史研究の一つの存在理由であろう。クーベルタンのこの素朴な叙述の中に、こうした努力の成果を認めることはむずかしい。しかし、一つの観念による統一的なスポーツの世界像の構築という作業は評価してよい。かりに、それがオリンピック競技復興によって完結する叙述であっても、体育家の描く体育史の中では異彩を放っている。いわば人類史的なスポーツ史である。

彼のスポーツ史はジュスランのスポーツ史と根本的に異なる。後者は、すでに述べた通り、古い時代のフランスのスポーツを、それが繁栄した社会生活の中に相対的に位置づけ、前者のスポーツ史は、歴史のどの時代に登場する人間にも「スポーツ本能」というイデアルティプスを想定し、その開花と衰退の繰り返しの中で、オリンピック競技という理念の達成を描いている。叙述の基本的な方法は、マモの体操協会史と共通であるともいえよう。

4. さて、1901年に出版されたもう一人の体育家の描く体育史に目を向けよう。

ティシエは「体育」⁽¹⁹⁾の序文で「19世紀フランス体育史」を描き、次のような時代区分を立てる。

1800~1815, ナポレオン時代. 1815~1845, アモロス時代. 1845~1868, 模倣時代. 1868~1870, 行政改革時代. 1871~1887, 報復時代. 1887~1890, 医学時代. 1890~1900, 身体復興時代, 民間先行時代.

ティシエの眼に映ずる19世紀のフランス体育史は、マモのそれとは大巾に異なる。ティシエは、この一世紀を「誤ちの100年」とであると断言し、体育行政の根本的失敗を指摘する。彼によれば、この根本的な失敗とは、アモロスの、器械による曲芸的体操が軍隊体育の内容を決定づけ、これが学校体育を支配し、体育指導者の軍人化を容易にし、指導者養成機関として専横な力をふるう陸軍体育師範学校(ジョアンビル校)が公的体育を牛耳ったことだという。ティシエはこのような誤まった体育行政の周辺に起こってきた民間の体育家たちの改革への努力を挙げる。すなわち、パスの体操協会創立(1873)、デムニーのバリ市学校体育の改善(1880)、自転車を中心とする戸外遊戯の流行(1886)、医学会の勧告(1887)、クーベルタンのイギリススポーツ教育の紹介、グルッセの全国体育同盟(1880)、クーベルタンのフランススポーツ競技連盟(1889)など諸団体の創立を挙げ、こうした動向にいち早く呼応した地方都市ボルドーにおける自らの活動を加えて、これらが1890年代に体育行政の改革と学生スポーツ活動の発展、そしてオリンピック競技の復興を生むと述べる。

ティシエの描く体育史は、明らかに官製体育の歴史認識への批判であり、具体的には、アモロスの体育の克服過程である。

1909年、デムニーは、「体育の発展、フランス学派」⁽²⁰⁾によってアモロスの方法やスウェーデン体操の方法を批判的に摂取し、フランスにおける近代的体育理論を文献解題する。彼はこうした学説的研究の基礎作業を通して、アモロスの方法を墨守する伝統主義的なジョアンビル校の官製体育の中に18~9世紀のフランスの医学者や体育家の貢献をつけ加える⁽²¹⁾。

デムニーの意図は、自国の過去の体育理論と現代の各国の体育理論の中央に、フランスの体育理論を構築することであった。彼は、これを「フランス学派」と名づける。

ティシエは、1911年「フランスとベルギーにおける体育の発展、悲しい歴史」⁽²²⁾でこうしたデム

ニーの態度を、「ジョアンビル校の折衷主義」(p.5)と批判する。同時に、フランス体操協会の活動を「一部分の青少年男子体操家だけの体育」とし、スポーツに対しても、その現状は「過激な競技的体育」(p.3~4)と、対立を明確に、リングのスウェーデン体操の理論に傾斜してゆく。

19世紀末に始まる、きわめて個性豊かな体育史叙述は、こうして互いに方法上の立場を異にする対立抗争へと発展し、方法論争は20世紀初頭に顕在化するにいたる。20世紀の前半は、この「方法論争」がさらに組織的拡大と激化を見せる時期である。G・エベールの「メトード・ナチュレル」は論争の渦中に産声を上げ、やがて一大勢力を形成するにいたる。しかし、彼の企ても、諸派の統合に成功しなかった。そればかりか、新たな対立を生み出すことになる。

体育の方法原理上の相異は、かならずや身体活動の技術上の相異に反映する。またそれは教育価値を背景に持ち、身体観や社会観へと広がっている。方法論争は単なる各派間の勢力拡張をめぐる争いではなく、第三共和政下にたたかわされた政治的闘争の影に蔽われるところの立場の相異の必然的帰結と解さざるをえない。体育家は、こうした争いの渦の中で自己の属する集団の普遍性を主張すべく、体育史像を描いたのである。

「方法論争」の功罪は何か。「方法論争」はかろうじて、アモロスの方法を克服する。ティッシュの語る通り、ジョアンビル校を頂点とする官製体育は民間における各派の運動の前に屈したと言ってもよからう。しかし、20世紀前半は体操か、スポーツか自然体育かといった新しい局面を現出させる。フランス体育の歴史を国民的尺度で眺めてみれば、「方法論争」は一面、旺盛な批判精神と体育方法の改善への努力が存在することの証しであるが、他面、国民のための体育を建設する統合的な力の結集を弱める結果を生んだ。このことは「方法論争」に登場した領袖たちの歴史像に明らかである。克服すべきものとしての「方法論争」に最も必要なものは、より客観的な歴史像の形成であろう。

以下に、「方法論争」の領袖の一人、クーベルタンの業績評価の発展過程の中に、この問題を移行させてみよう。

Ⅲ クーベルタン研究史における「方法論争」の克服

1. さて、フランスにおけるクーベルタン評価が方法論争からの特定の歪みをもちつつも、今日に到る発展を辿ってきたことは言うまでもないことである。1960年に出版されたセネイ・エルベ「クーベルタン氏」⁽²³⁾は、クーベルタンに対して与えられてきた評語を列挙している。「過去の人物」、「情熱の職人」、「スポーツ界のデルレード」、「アーノルドの弟子」、「バゼドウ、ベスタロッチと並ぶ学校改革者」、「奇妙な非国教徒」、「逆説の軽技師」、「捨てぜりふと剽窃の不可解人士」、「病める時代の犠牲者」……(p.2~3) オリンピック復興の人は、フランスにおいてこうした混沌たる評価を受けてきた。1960年以降、クーベルタン研究は、すくなくともフランスにおいてこうした混沌たる評価に一定の確実な方向を与えてゆくことになる。この傾向はやがて、クーベルタン研究の扱うべき基本的疑点、「何故クーベルタンはオリンピックを復興したか」、「何故、クーベルタンは、フランスにおいて評価されなかったか」……を形成してゆくことになるのである。この動向について述べる前に、以下に、1960年に到る研究の歩みと傾向をかいつまんで述べておく。

1924年、二巻の大型出版「スポーツ大事典」⁽²⁴⁾がフランスオリンピック委員会、フランス体育協会の共編で日の目を見た。この出版が当時のスポーツ界の発展を示すものであることは言うまでもないが、その第一巻でブルドンはクーベルタンの業績を、教育史で描かれるところの新教育運動の一環として評価すべきだと指摘する⁽²⁵⁾。

第二次大戦前後を通じて、オリンピック運動が世界平和に一役をになうものとして発展していったのと平行して、クーベルタンの評価はもっぱらオリンピック復興の人という一点に傾斜していった。ジレが「スポーツの歴史」(後述)に示唆する如く、ブールドンはまさにいち早くクーベルタンを彼の時代の限界においてとらえようとしている。ほぼ同じ頃に出版されたマルセル・ラベ編「体育概論」の中のベルジュロンの筆になる「体育史」⁽²⁶⁾の章が、「スポーツマン」「オリンピック復興者」と数行で紹介し、(1930年)、またシャーゲンの博士論文「人格発達における体育の役割」⁽²⁷⁾では、通史の中にクーベルタンをとりあげず、オリンピック競技は異民族国家間に設けられるとき、復興の意図と反対に、四年毎のナショナリズムと国粋主義の刺激剤となると、クーベルタンの評価をさしひかえる。

クーベルタン自身も、こうしたオリンピック競技の歪曲を認識し、ローザンヌにおいて世界教育の改革を呼びかけ、1928年「国際スポーツ教育局」を創立していた。この機関は1931年、クーベルタンのオリンピック競技関係の講演録「オリンピックの回想」⁽²⁸⁾を編集し、クーベルタンのスポーツ理念を宣伝している。また、1933年、クーベルタンの古稀を祝って、エジプト、ギリシア、リトワニア、ポルトガル、スウェーデン、スイスの各国内オリンピック委員会の共編で、「ピエール・ド・クーベルタンの著作、講義、談事目録」⁽²⁹⁾を出版し、クーベルタンの業績を称えている。巻末に附された「クーベルタンの事業」を参考までに註に訳出しておく⁽³⁰⁾。

1930年代と40年代のクーベルタン評価は、1937年ジュネーブにおけるクーベルタンの死という決定的事件を経たにもかかわらず、フランスでは依然としてオリンピック競技会の復興と発展の文脈でとらえられていたように思われる。(この時期の雑誌論文にはまだ目を通していない。)何故ならば、主として戦前のフランス体育史の代表的研究者である、B. ジレの戦後間もない出版「スポーツの歴史」⁽³¹⁾は、第一次大戦前に大きな転回を見せた体操教授史からスポーツ史への体育史の書き替え(クーベルタン自らもこの仕事に重要な貢献を行った)を踏まえ、クーベルタンと同じようにスポーツ史をオリンピック復興への道として描いているからである。このスポーツ史が「方法論争」を克服する体育史的認識を準備しているとは思われない。現に、ティッシュはすでに物故(1935年)していたが、エベールはなお健在の状況であった。

確かに、オリンピック競技会はベルリン大会まで種々の問題を孕みながらも一定の発展を示していたし、国外でのクーベルタン評価も、「オリンピックの父」として確立していた。ベルリン大会の企画者カール・ディームはクーベルタンの初期の「教育の国際的改革」の思想を指摘しつつも、「それは本意を達しなかった」とし、「ただ、オリンピックの世界では、彼は創設者として今や輝やく星のようにまたたいている。」と評価した⁽³²⁾。(1936)

フランスにおけるクーベルタン評価は、1960年にいたるまで低迷を続ける。「方法論争」の揺籃となったナショナリズムは、国籍なき組織が繰り広げる国際スポーツ競技の世界の中に呑み込まれている。フランスがクーベルタンを捉えるよりも、クーベルタンがフランスを世界の一国として捉えているといってもよからう。

1852年以来、フランス体育制度の要を自任してきたジョアンビル校は、クーベルタンの展開したスポーツ競技復興の業績に対して、「初期において、ジョアンビル校がこの運動に大変好意的でなかったことを否定することはできない」⁽³³⁾と明記した。クーベルタンをその渦中の人とした「方法論争」のバイアスが、第二次大戦後、ほぼ15年を経過するまで、彼に対する国民的評価を逡巡させてきたことは明らかである。

2. 1960年という時点からフランスにおけるクーベルタンの業績評価の歩みを、ふり返って眺めてみると、スポーツ史あるいはオリンピック史の中での評価が目立っている。いいかえれば、C I Oの側からの評価である。フランスでは「方法論争」の立役者たちは既に他界していたのにもか

ならず、戦後15年余りを過ぎたこの時期にも、いまだその余韻が響いていると見てよかろう。クーベルタンの伝記的研究が上梓されたのは、単行本としては先に述べた1960年のセネイ・エルベの「クーベルタン氏」がはじめてである。これは、厳密には研究論文というよりも、クーベルタンの数多くの著作、講義録などを整理し、クーベルタンの人物、思想を多角的に捉えようとするアントロジックな編集作業である。しかし、こうした出版が、60年代のクーベルタン研究を発展させる礎石となってきていることは否定できない。

一方、オリンピック競技会に代表される世界スポーツの発展を、一つの「スポーツ現象」として捉えなおすことによって、そこにおける幾多の問題に新しい解明の視点を提示する論文も、これと平行して著わされる。1960年、メイエ「オリンピック現象」⁽³⁴⁾はこの意図のもとに従来のクーベルタン評価に、現代オリンピックスポーツの矛盾という側面からその光をあてて、この矛盾をクーベルタンの思想上の矛盾の問題として追求しなければならないという示唆に富んだ論考を加えた。

メイエは、晩年のクーベルタンの論稿を検討している。その結果ノーベル賞に匹敵する程のクーベルタンのオリンピック競技復興の業績を、フランスはグルッセやサン・クレールの「二番煎じ」だと、十分に評価してこなかったばかりか、(p.18) 彼の理念はフランス人に理解されず、そうしたフランスの無理解が、遅すぎたレジオンドヌール叙勲に対する彼のにべもない拒絶を生み出したと述べる。(p.13) メイエは、フランスのクーベルタンへの無理解の原因は何であったかという疑問にも若干の考察をすすめている。これは後のクーベルタン研究への初太刀である。すなわち、体操、軍事訓練、スポーツの間の軋轢を反映するスポーツ組織者たちのクーベルタンへの姿勢と、クーベルタン自身のアポリティズムという両面から迫ろうとする。クーベルタンはスポーツに体操も射撃も含めた概念を与えようとしたのに対し、(彼はオリンピック競技種目に体操も射撃も含めようとする)体操協会は、体操(Gymnastique)とスポーツ(Sport)は対立するものとつっぱね、射撃協会は国際オリンピック委員会の傘下にはいること、他のスポーツ種目と同列に置かれることを拒否したという事実(p.48)、1936年ベルリン、1940年東京と枢軸諸国のオリンピック競技への接近の様相にいらだつC I O内部とジャーナリズムの国際政治的感覚からの批判に対するクーベルタンの汎世界主義、平和主義的オプティミズムが不可避の世界大戦へと暗転する国際政局の前に決定的に色褪せていった事実(p.14~5)、などを挙げてこのいきさつを説明する。

1964年、ブローニュは「ピエール・ド・クーベルタン、初期の思想」⁽³⁵⁾によって、従来とは異なる角度からクーベルタンの思想形成期の姿を描く。特に、少年時代のノルマンディー地方での田園生活を彼の思想の揺籃として描き、1870年の敗戦後のフランスの世論を襲った無力感にひたりつつ、愛国主義者ポール・デルレドやモーリス・パレスの思想へと接近し、言語教育の問題から歴史研究家への道を選び資本主義体制下の労働者階級の問題を考えてゆく中で、やがてヨーロッパの教育問題に目をひらき、フランスの教育改革を志すにいたるという描き方である。

1960年代は、こうしてクーベルタン研究に新しい視野を開いてゆく。特に、初期の思想形成期の研究では、クーベルタンを中心とする19世紀末のフランス体育スポーツ史の再評価が未公開史料の発掘とともに現われはじめる。

クーベルタンに関する Biographique な標準的な知識は、次々と新しい事実の指摘によって肉づけされ、それらをもとに、一層緻密な人物研究の方法論が提唱されてゆく。

クーベルタンの家系、家柄、家族生活、両親、少年期の行動、青年期の思想形成など世紀末のフランスの社会の中に如実に描こうとするエイケム女史の力作「ピエール・ド・クーベルタン、オリンピック叙事詩」(1966)⁽³⁶⁾は、60年代を代表する研究とってよかろう。著者は特にエベールとクーベルタンの間にとり交された書簡の公開も行っている。エベールの死去(1957年)によって、「方法論争」の領袖たちはすべてこの世になく、彼らの遺産たる体育組織、「フランス教育体

操連盟」FFGVGE (ティシェ), 「フランス体育連盟」FFEP (エペール), 「国際オリンピック委員会」C I O (クーベルタン), (あるいは各種目別スポーツ競技団体, その前身は USFSA) も, 戦後学校体育の方法の自由化 (1945年通達) のもとでそれぞれ独自の領域を開拓し, 過去の形式的論争を一掃する (心理=運動系の因子分析による) 新しい方法理論の研究の兆しの中で, すでに過去の事実となった「方法論争」に歴史的評価のメスを入れることが可能となった。

クーベルタンに対するフランスの愛惜は, 1963年, クーベルタン生誕百年記念式典 (パリ) や, こうした研究成果とともに形成されてゆく。そこには, あたかもクーベルタンをフランスに取りもどすための意図すら認められる。あるいはまた, かってティシェが叫んだようなフランス人によるフランス人のためのフランス的体育といった「フランスの栄光」を謳うゴーリズムと融合するナショナリズムの色あいさえ感じさせる。

1960年代を飾るもう一つの傾向は, クーベルタン批判の出現である。メイノーは, 「スポーツと政策」(1966)⁽³⁷⁾の中で, クーベルタンをC I O組織の考案者として評価した上で, C I Oの基本的性格を, 「専ら個人のイニシアティブに依存し……」(p. 106), 会長の「絶対的権力体制」下に置かれた「クーベルタン型誠実力行の組織」(p. 102)と評し, この国際組織を支える国内オリンピック委員会を規定するクーベルタンの Nation 観を「英語の用法, すなわち, 国家の中に形成される政治単位として用いるのではなく, フランス語の用法, すなわち, 国民性 (国籍) の原理, Nationalité に対応するところの一つの集団の意味, この集団を取り込もうとする国家に対置されるありとあらゆる自律的集団の意味に用いている……」(p. 111)と説明し, クーベルタンが国際オリンピック委員会から政府間機関の性格を注意深く取り除いた点に着目し, 少なくとも国家の連合体たる国際連合のやってきたことよりC I Oのやってきたことの方が意義ありとしながらも, 今日われわれがかかえている世界的なスポーツの諸問題は, クーベルタン精神の墨守では克服できないところに来ていると指摘している。

メイノーのこの指摘は, クーベルタン研究に社会科学の視野をもたらす。クーベルタンという人物の研究を通して, 今日われわれが直面しているスポーツの諸問題を解明する方法確立の可能性が準備されているといってもよからう。このことは, 従来から提出されてきた二つの疑問, 「何故フランスはクーベルタンを評価しなかったか」, 「何故クーベルタンはオリンピック競技を復興したか」という, 多少国家的関心の色あいすらただよわせるこれらの疑問に対し, 「何故, クーベルタンを研究するのか」という最も基本的な疑問が生じてくるのである。

クーベルタンをフランスという国の生んだ英雄にすることは, どう見ても彼の全生涯がそれを裏づけるようなものではないだけに, あるいはこの国が彼の思想を育んだとかるうじて言えたとしても, 形成された思想そのものはむしろ, そうした国家や国民の関心とへだたりのある国際主義, 平和主義を示しているだけに, 多少の無理を感じないわけにはいかない。それでも60年代のこの傾向の出現は, すくなくとも方法論争の陰湿な空気が, ようやく取り除かれたことを示している。この点では, 一定の客観的評価を過去の人物に対して下すことができるようになったということであろう。

ジレは1967年再びクーベルタンの評価にとり組んでいる⁽³⁸⁾。今度は, クーベルタンの初期の業績をフランスの教育改革の進転の中に位置づけることによって, オリンピック競技復興までの彼の思想と行動の一貫性を描こうと努力する。(p. 1197) これによって, スポーツ競技の担い手であると目される学生と, その指導者たるクーベルタンとが, フランスの伝統主義の牙城, 大学教授団に迫ることができなかったことが明らかにされる。体育の問題で大学の伝統主義に一定の説得力を有する者は, 衛生学者, 医学者であり知育過剰と学習の削減という中等教育の基盤を揺がす改革の動

向は、かならずしもスポーツ普及の世論とは結びつかず、1888年学校体育調査委員会（クーベルタン委員会、またはジュール・シモン委員会の別名）も、バシヤル・グルッセの「全国体育同盟」も、スポーツの学校への導入という目的を果していないと説く。（p.1199）ジレの叙述は、あくまでもオリンピック競技をスポーツ史の中心に置くのであるが、こうした初期の活動の指摘の中に、1960年代のクーベルタン研究の反映がみられる。すなわち、ジレはクーベルタンの生涯の課題をオリンピック競技復興に求めながらも、20世紀初頭の新教育運動（明確な意識ではない）をそのための手段として利用したと述べるあたりに、クーベルタンをフランス人として見なおし、フランスがオリンピック復興のために醸成した諸条件に注目しようとするのである。また別の見方をすれば、フランスの教育界の認識は、いまだスポーツによる青少年教育の復興にではなく、体操と軍事訓練による青少年の再組織化に、いいかえれば、国家の教育再建にあったと、その対照を描いているものとも受け取れる。

ブローニュは、1968年に再び重大な仮説を立てる。「ピエール・ド・クーベルタンとアングロサクソンの世界」⁽³⁹⁾の中で著者は、従来、英国心酔者、アーノルドの弟子、新教育運動家という文脈で捉えられ、何らの疑点も見出されることのなかったクーベルタンの思想形成期の描写を覆えそうとする。著者の掲げる論点は、おおよそ次の三点である。(1)クーベルタンは、ジョルジュ・オローというペンネームで若干の著作を残しており、そのうちの一つ「或る転向者の話」⁽⁴⁰⁾（1898）には、アメリカの若き民主主義への憧れがはっきりと読みとれる。(2)テヌの「イギリス・ノート」に導かれてラグビー校の教育に注目し、イギリスに渡り、アーノルドの墓の前で靈感を覚えたという描き方は、相当誇張されている。むしろ当時のイギリス教育の事情の情報源は、文相がドモジョとモントゥッチの両名を派遣して行った大規模な調査の報告書である。クーベルタンが自国の中等教育の誤ちを認識するについては、彼自身の相当綿密な比較研究がある。(3)アーノルドの教育思想をつぶさに分析すれば、クーベルタンがアーノルドからスポーツ教育の思想を受け取ったとするのは誤りである。アーノルド自身は学生のスポーツに対して、かなり厳格な態度を持っていたのであって、クーベルタンは、ヒューズの「トム・ブラウンの学生生活」を通してのみアーノルドを理解し、この理解にもとづいて、1908年「21年間のキャンペーン」⁽⁴¹⁾に、「植民地帝国の先兵」を形成するために、青年の自立的教育が行われ、体育に重要な役割が与えられていると、イギリス教育を意義づけている。

特に、(3)はクーベルタンが自らの解釈によってスポーツ教育の理念をフランスに宣伝したという大胆な仮説であり、イギリス中等教育に追随するかの如き英国心酔といった心理的解釈をしりぞけることになる。

ブローニュの一石は、やがて1970年のウェーバーやチボーの論文に波及する。

こうした問題視角の変化の中で、「何故、クーベルタンはオリンピックを復興したか」という疑問は単なる手柄話から、今日のわれわれを捉えているスポーツ観の問題の解明へと姿を変えてゆくのである。1968年、ブエは「スポーツの意味」⁽⁴²⁾でクーベルタンを、現代スポーツに明確な概念「クーベルタニズム」を与えた一人のスポーツ思想家と見なしている。（p.364）今日、スポーツとは何かを問う者にとって、この思想家は重要であろう。「何故、クーベルタンはオリンピックを復興したのか」は、「何故、クーベルタンを研究するのか」という疑問と不可分なのである。「オリンピック競技復興の人」である限りにおいて、クーベルタンは各国の体育史研究者の取りあげる人物であった。どの体育史通史においても、彼の組織者としての先駆的業績が上梓される。しかし、この確定的とも見える評価は、オリンピック競技が栄光に満ちた歩みを進めていると捉える限りにおいて成り立つといえないか。

近代オリンピック競技は、古代オリンピック祭典のように、成立と展開と衰退の過程を持つ一つの

歴史的事件ではない。われわれは、現にオリンピック競技の展開の過程に生きている。1960年代までの諸研究は、一方においてクーベルタンの履歴を精密にしたが、もう一方では、彼のオリンピック競技への注目を、フランスの教育改革運動から説明した。この説明は、先に述べた国家的関心を除けば、近代オリンピック競技がその成立期において、フランスの若い世代の復興を動機としていたと指摘する点で、先駆者の意図とは異なった姿をとる今日のオリンピック競技の問題性を暗示すると言ってもよいであろう。今日のオリンピック競技が包摂する問題の根源を究明することは、単なるオリンピック競技のクロニクルにつけるものではない。そこでは、必ず国際政治の機構から独立しようとする国際オリンピック委員会の組織の今日的意味が問われなければならないし、この組織の原理を考案したクーベルタンの思想の形成期における諸条件の分析が必要となる。

近代オリンピック競技史を仔細に描くことは、もとより本稿のねらいではないが、1960年代のクーベルタン評価は、このようにして、近代オリンピック競技史の今後の研究の広がりをもたらしているのである。そして、この広がりの中で「何故、復興したか」が、「何故、クーベルタンを研究するのか」という疑問に確固とした答を示しているのである。

これまでのところ、クーベルタンの業績が、「方法論争」の影響下に一定の評価を受けてきたいきさつを、比較的古い時代からのフランス体育史叙述の形成過程と関連させて概観し、第一次大戦前後のクーベルタン研究の動向を描くことによって、1960年代を一つの重要な転回点としてきた。

さて、こうした研究動向の現代における最終的な帰結はどのようなものであろうか。

以下に、1970年代のいくつかの論文を取り上げておこう。

3. 70年代の最初を飾るクーベルタン研究は、E. ウェーバーの「ピエール・ド・クーベルタンとフランスにおける組織スポーツの導入」(1970)⁽⁴³⁾である。[著作は、カリフォルニア大学教授で、1968～9年ボルドー大学文学部カリフォルニア研究所長在任中にこの研究を行っている。本稿の題意から若干はずれるが、フランスにおける体育史研究に大きな貢献をなす論文であることは、チボー(後述)の認めるところであるし、その研究方法は紹介に値するのであえてとりあげる。

ウェーバーは、次のような素朴な驚ろきからこの研究に着手する。すなわち、今日、世界のスポーツの一大祭典にまで発達したオリンピック競技を復興した人は、スポーツの世界ではさほど功績のないフランスという国に生れ育ったのだという驚ろきである。彼は、19世紀末のフランスの社会、教育、政治そしてスポーツ界の形成といった背景からクーベルタンの思想と行動を解釈する。特に同時代人モーリス・パレス、ロマン・ローラン、レオン・ドーデ、シャルル・モラス、マルタンデュガールの小説の主人公ジャン・パロワ、モーリス・ルブラン、トリスタン・ベルナル、シャルル・ルイ・ボードリー・ド・ソーニエらに共通の思想と行動を求め、彼らに代表される一握りの階層(フランス・ブルジョアジー)に属する青年達の奔放な人生観と、クーベルタンのそれとの一致を指摘しながら、クーベルタンの思想形成期を描いている。テーヌの「イギリス・ノート」に導びかれて英国心酔者として、トーマス・アーノルドの教育に傾倒してゆく過程は従来の叙述に従っているが、ウェーバーはこのクーベルタンの第一歩にすでに新教育運動の担い手としての思想の成立を明言し、ドモランとの共通点を指摘する。とりわけ、民主主義の選良の育成をめざす中等教育改革の動向と、クーベルタンの理想的人間像や同時代の文学者たちの描く人間像がどのような一致を見せるかを示している。例えば、当時の青年達が皮相的に理解したニーチェの超人、高潔なる人間、モーリス・パレスの作品に描かれる人間の力への情熱、自己実現への努力、常識的現実を超える自己の確立、世界の再創造、満たされぬ世界からの逃避、そして、スポーツがこうした青年の行動に合致していたことなど。これに対して、クーベルタンの描くスポーツマンの階級性格が浮き彫りにされ、大衆スポーツへの道をとざすアマチュアリズムへの必然的傾斜と、その精神の反実用性、こうしたブルジョアスポーツ観が「金利生活者の消費」と合致すること、そして、「世紀

末」を生きる進取の気骨を持つ青年像の例として、モーリス・ルブラン（製糸業者の息子、フランス初のスポーツ小説「これが翼だ」1898年を著わし、「アルセーヌ・ルバン」で当てた）、トリストアン・ベルナル（出版業を振り出しに、自転車競技場の建設ののち劇作家となる）、ボードリー・ド・ソーニエ（法律家の道を捨て、文学雑誌の創刊ののち、自転車関係の出版、自動車の普及とともに、ドライブガイドの編集で名を売る）が挙げられる。

ウェーバーは、こうした状況のもとでクーベルタンの思想とその矛盾が形成されたという。彼の指摘は、6点にまとめられるであろう。(1) クーベルタンの思想は19世紀的貴族のロマンチックなエリート主義であること。(2) 保守的伝統に依存しつつ国際主義・平和主義を標榜していること。(3) 近代的民主主義と競争社会の原理に裏打ちされたエリート主義が競争を公正に行うことを建て前とする（実はそうではない）スポーツの世界と合致すること。(4) 大衆を中等教育から差別する仕組み（公正無私の文化）とスポーツの反実用性との対応が中等教育とスポーツ活動の接近を可能にすること。(5) 中立を建て前とするスポーツの観念と、その政治利用を許す現実との矛盾を生み出す根源は、実にこの19世紀末のエリート主義の矛盾の反映であること。(6) 労働者階級の国際主義と平和主義と、ブルジョアの国際主義、平和主義の対立の中でクーベルタンのスポーツ教育は世紀末の青年層をとらえた新芸術運動、フォービズム、キュービズム、未来派と同列に置かれたこと。

こうした思想上の矛盾はやがて、クーベルタンの描く理想を褪色させ、初期のアーノルド主義もその意味を喪失してゆくと、ウェーバーは指摘し、結びとして次のようなきわめて悲観的な言葉を置いている。

「（フランスのエリートは結局スポーツを採用せず、ジェントルマンではなく、試験にパスする人間を育成した。）こうした状況下にスポーツ競技は社会的有効性を喪失し、エリート層にも大衆にも間尺に合わない（精力発散でなければ贅沢にしすぎない）ものとなってゆく……。共和国の立法者たちの政治的要求にも思想にも合致せず、スポーツの道徳的色彩はたちまちのうちに色褪せた。」

以上、多少冗長であったが、ウェーバーの論文の内容を少し詳しく紹介した。

従来、多分に美化されてきたクーベルタン像と、オリンピック競技の復興の偉業、その後の発展の中で栄光につつまれているかの如き彼の思想は、ウェーバーの分析によってきわめて矛盾に満ちたものとして新解釈が加えられている。クーベルタンの描いていた青年教育の夢が、ある特定の悪感情や「方法論争」の確執からではなく、19世紀末、フランス社会の特有の階級対立や政治的不安定の醸成する諸条件によって一つの挫折へと導かれたという指摘はユニークなものである。

ウェーバーゆかりのボルドー大学教授ジャック・チボーは「フランス中等教育における体育の発展に及ぼしたスポーツ運動の影響」⁽⁴⁴⁾の中で、この研究を、従来中等教育の学生たちの数の上でもさほど影響力のあったとは言えない自律的活動期として描かれすぎたきらいのあるこのスポーツ草創期を扱った論文として高く評価している。（p.133）

チボーは、基本的にウェーバーのクーベルタン評価を認めるのであるが、「ダンディズムからスポーツへ」（1974）⁽⁴⁵⁾において、ウェーバーが英国心酔と新教育運動とのからみ合いで、イギリススポーツのフランスへの輸入の過程をおさえようとするのに対して、スポーツの教育的側面に傾斜のかかった従来の解釈を離れようとする。チボーは、イギリススポーツをフランスに輸入する担い手たちの教育的意識ではなく、スポーツ実践における流行感覚、すなわちダンディズムという心理的側面から、英仏スポーツ交流の前史を描こうとする。

この角度から光を当てる時、イギリススポーツの輸入の担い手たちは、必ずしも、クーベルタンのような明確な教育課題を温めていたものたちばかりではなくて「ダンディー」たちの流行感覚

が主流ではなかったかと問いかける。そしてクーベルタンは一貫して、教育的観点から、このダンディズムを批判していると指摘し、このダンディーたちのスポーツ観を分析することによって、グルッセとクーベルタンの立場の相違を説明しようとし、また学生スポーツ団体の内部に潜むダンディズムからの「ブルジョア顔負けの」労働者差別意識を明るみに出し、その反動性を指摘する。

ウェーバーの描くような、ニーチェを誤解し、「超人」に憧れる青年層と、チボーの描くダンディズムに染まる青年層とは果して同じグループの青年達であるのか、今後の研究課題となろう。チボーの着眼は更にイギリスのスポーツを受容する諸条件の成熟という点でも新らしさを提供するであろう。

70年代のクーベルタン研究は、従来の諸説の批判や訂正を含む新しい問題視角からのアプローチという点に、これまでにない建設的な面を打ち出している。このことは、クーベルタンという人物の重要性を高めてゆくことである。

この点、ブローニュの「ピエール・ド・クーベルタンの教育的業績に関する一考察、実用体操から大衆スポーツへ」(1973)⁽⁴⁶⁾は好例である。

この論文は、ウェーバーの論文がクーベルタンの初期の思想形成過程を中心に扱っているのに対して、後期に重点を置いている。

著者は、1906年のクーベルタンの「実用体操」⁽⁴⁷⁾と題する著作の意味を追求している。ブローニュによれば、従来、スポーツ教育一辺倒の研究の動向の中で、目立たぬ存在であったこの書が、実は、クーベルタンの大衆スポーツ教育の構想を示す鍵となる重要な著作であるという。つまり、クーベルタンが、この書によって「体育を悩ませている内部争いに終止符」をうつことを期待していたことを示し、「方法論争」とクーベルタンの関わりを指摘する。

ブローニュは、1891年以来「学校体育指導要領」が、従来軍事訓練にかわって遊戯活動に場所を明け渡したにもかかわらず、基本体操、応用体操、遊戯の三領域中、応用体操の領域に、従来の形式的軍事訓練の肩がわりをするような実用的教材を指定することで、学校体育にこめられた為政者の軍国主義を、自由主義や民主主義の題目の中に隠蔽していると、19世紀末から20世紀初頭の学校体育のありさまを描きながら、こうした状況下でクーベルタンはフランスの中等教育における体育のあり方を、20世紀の産業社会の展望のもとに若人の生活に一層役立つ実用的体操の具体的計画を提示した意味を解明する。

20世紀に生き、未来を切り開く青年の育成を、クーベルタンが目ざしていたことは、これまで見てきたとおり、彼のスポーツ教育の思想を取り扱う諸論文でも明確に指摘されているところであるが、ブローニュはクーベルタンの別の著作からこの青年像（「解き放たれた筋肉をもった戸外遊戯人、……強い意志をもった知的な人間……陰湿なロマン主義を遠ざける目ざましい想像力を持つ冒険人……世紀の変貌に適応することのできる行動人……」）を具体的に示す。そして、この青年像がクーベルタンの言う「目ざましい人間」（デブルイエ）を指すとし、これまで知られていなかった1901年のクーベルタンのノルマンディー地方での実践指導を証明する史料を挙げて、彼の実用体操がこの青年像とどう対応するかを考察している。

ブローニュは、学校体育の応用体操の領域と、クーベルタンの実用体操が、共に実用性という線で一致点を有し、それ故、クーベルタンの実用体操が軍事的評価を許すことを懸念しながらも、両者の間には伝統的なアモロス式器械体操の採否の点で大きな違いがあるとする。

実用体操の教材分類は、きわめてユニークである。すなわち、走、跳、登、投、泳、格技、剣術、乗馬、自転車、自動車、工場での手仕事といった多彩な教材が、救助、防禦、移動の三つの教材群に分けられている。特に手仕事労働を組み入れている点を、ブローニュは重視し、中等教育における労働能力の陶冶の意味を問いかける。

この教材の生活訓練的意味と、エベールのメトード・ナチュレルの教材の自然的意味の類似が検討され、果して、クーベルタンの実用体操がエベールのメトード・ナチュレルの形成に影響を与えたかどうかという、エイケムの問題提起が取り上げられる。1911年のエベールからクーベルタンに宛てた手紙をもとに、エイケムはエベールが当時クーベルタンを認知していなかったと、故意の無知を装ったことを厳しく非難し、クーベルタンを「自然体育の父」として、エベールへの影響を逆に証明しようとしているが、この論証は正しくないとされる。そしてブローニュは言葉の正しい意味で、両者とも誤ちの多い自然体育の父であると見るのが妥当であろうと述べる。

クーベルタンの実用体操の性格を検討する文脈から伏線として生み出された、ブローニュのこの見解はもはや「方法論争」の時代が去り、エベールの業績もまた、歴史家の評価を受けるべき時であるということを教える。すくなくとも、伝統的なアモロス式体操や、スウェーデン式体操が20世紀という新しい時代のおとずれを前に克服されなければならない運命にあったことを認めるならば、クーベルタンにも、エベールにも共にこの時代的課題に挑んだ功績を認めるべきであろう。

こうした傍論をふまえながら、ブローニュは大衆スポーツないし生涯体育・スポーツの構想を、クーベルタンの数多くの論文をもとにして描き出そうとする。ブローニュの説によれば、クーベルタンは学校体育の方法をめぐる交されたスウェーデン体操派、スポーツ派、自然体育派の間の争いを調停するために、これら三派に適切な年令的分担を行わせようとしたという。つまり、クーベルタンは初等教育段階を科学的体操（スウェーデン派）に、中等教育段階を実用体操に、社会人の段階をスポーツ競技に分担させることで、すべてのグループに対象を与えることができると考えた。

クーベルタンを生生涯体育・スポーツ論の唱導者として描くというブローニュの独創的な論述は、明らかに今日の問題を反映している。今後のこの角度からの研究の発展が期待できよう。

以上、1970年代の代表的な論文を比較的詳しく紹介してきた。ウェーバー、チボー、ブローニュのクーベルタン研究は、クーベルタンという人物がきわめて多岐にわたってフランスの体育の発展に貢献していることを教えてくれる。60年代を彩る諸論文の動機がフランスにおけるクーベルタン研究の低調さへの反省と、フランスにおけるクーベルタン評価を高めようという（若干焦燥に迫られた）断定から生じていたとするならば、70年代の諸論文は、むしろ、こうした過熱を静めて、より一層実証的な態度と鋭い問題意識からクーベルタンを再評価しようとする意図において共通するであろう。

50年前、ブールドンの提起した新教育とクーベルタンの活動との関連については、ウェーバー、チボーによって教育史的解釈がほぼ確定的となった。この面では、かれらは新教育運動史の研究にも貢献していると見てよいのではないか。クーベルタンを中心とすると、フランスの教育改革とスポーツの関係は、相当深いものと見なしてよからう。それならば、新教育運動の側から、例えばドモランのような人物の側からは学校体育の改革とスポーツの導入はいかに描くことができるのだろうか。きわめて興味ある今後の課題である。

ブローニュは、従来、「方法論争」の持つ個有の限界を打破している。それを単なる分裂として見るのではなく、20世紀初頭のフランスの体育界の統一的課題の個別的側面への展開と見る可能性をわれわれに暗示している。もしこの統一的課題が何であったのかを描くことができるならば、そこに新体育の像が浮かび上がるであろう。

VI むすびにかえて

フランスにおける近代体育史像の形成について考察をすすめてきた。題意に沿った論証には、さらに古い時代の体育史叙述をとりあげる必要がある。近代体育の制度の確立は、すぐれて近代国民国家の成立と軌を一にしている。この点、近代体育史は自国体育史として叙述されと言っても

よかろう。Ⅱ、Ⅲ、を通して、フランスにおける体育史像の形成過程は、まさに諸外国体育の移入から、それらの克服への自国体育史像形成過程であることを示した。本稿では、特にこの過程を、体育家の歴史認識の歩みとして捉えようと、あらかじめ仮説的伏線を敷いたため、18世紀の体育書に見られるであろう医学者や教育家の体育史叙述を意識的に省いた。彼らが体育的過去をどう捉えていたかということは、稿を改めて論究したい。

体育家の歴史認識の歩みに注目すれば、19世紀は「体育家一代の回顧録」から、「方法論争」を顕現させる実践的立場の個別的成立史への歩みであり、その20世紀への展開は、体操史ないしは体操教授史としての体育史から、スポーツ史としての体育史への再解釈の歩みであると言えよう。

「方法論争」成立の意味は、これらの過程の第一転回点として問うべきである。この点、クーベルタン研究の発展によって主題を論じたことは、単に「方法論争」の領袖の一人を恣意的に選択したのではなく、「方法論争」という個有の現象を結果した体育家の歴史認識を、フランスの現代体育家が克服する過程を、最もよく示す人物であるという含意による。「何故、フランスはクーベルタンを評価しなかったか」という、1960年代の動機の形成は、「方法論争」の再燃ではなく、その克服の第一歩を示唆する。実際、体育家の実践的関心に直接こたえる個人の回顧録や団体の成立、発展史といった叙述の方法論は、次第に影をひそめてゆく。否、存在するにしても、それは特定のジャンルの体育史として位置づけられてゆく。

1970年代に出現する新しい体育史像は、スポーツ史的再解釈と、より一層客観的な叙述のための実証に裏づけられている。ジャック・ユルマンの「体操から近代スポーツへ」⁽⁴⁸⁾という思想史的研究は、すでに1965年、この動向をリードしていたことをつけ加えておこう。クーベルタンのオリンピック精神を称えることや、クーベルタンを意図的にフランス体育史につなぎとめることは、もはや、過去の体育史研究の態度となってしまった。体育家の手になる体育史は国民的関心を潜めて、専門家による専門的研究へと発展する。このことは、体育における実践と理論の乖離を意味するのだろうか。

この点について、以下に若干の補足と展望をつけ加える。

ルネ・ムーニエは「1850年から1914年までの体育における制度的変革」⁽⁴⁹⁾において、従来の体育史叙述を批判し、制度、思想、活動などの混然たる叙述であると述べ、体育制度の枠組を明確にしなければならぬと、制度史研究の方法論を展開している。ユルマンの体育思想史とともに、研究の専門化を裏づける論文である。人物研究の分野でも、クーベルタン研究の他に、スピヴァックのアモロス研究⁽⁵⁰⁾、チボーのティシェ研究⁽⁵¹⁾、マルタンのダルクローズ研究⁽⁵²⁾など、専門化を示す論文が60～70年代に提出されている。

冒頭に述べた通り、本稿は身体的諸活動の全体を体育の領域に含め、体操史、遊戯史、スポーツ史、学校体育史、社会体育史などが分化し、統合あるいは克服されてゆくありさまを、体育史叙述の発展過程として捉えやすくしようと配慮した。身体活動の形態によって体育史を分類することは、それ自体、体育史研究発展の一段階であるとするならば、今後の専門的研究の発達によっては、こうした区分もまた意味を失うことになるであろう。スポーツ史、体操史、遊戯史などが個有の領域と方法論を確立すれば、体育史は一つの教育史となるのではないか。

専門化した体育史は、もはや体育実践には縁のない学問になってゆくのか。体育館と図書館とは、互いに対立する教育の施設となってゆくのか。かつて、体育史が「体育家一代の回顧録」であった時代に、体育史は体育実践そのものの記録であり、体育家の生涯を世に示す金字塔であった。自己の実践の正しさを客観的に証明してくれる手段は、己れにとって最も身近な過去の事実、つまり自己の記録の中のみ見出しえた。彼が生存する限り、彼の生存が彼の実践的過去の正しさを証明するであろう。

同じことは、「方法論争」の成立過程についても言える。特定の組織や団体の存続の記録、特定の理論の周回形成される実践的集団の発展の跡づけ、これらの編年史を精神的支柱とするそれぞれの実践が国民精神を標榜しようとする時、「方法論争」が現われた。自国体育史の統一的像が形成される前に、国民的方法という覇権をめぐる闘いがくり広げられたのである。クーベルタンは、こうした状況のもとで、スポーツ史の国際的展望を持っていた。オリンピック競技の復興以後、スポーツ史は、すぐれて、世界史として描かれる運命を背負うことになった。今日、われわれは、未だ、この世界史像を形成するに至っていない。

チボーは、「歴史研究と体育・スポーツ活動」⁽⁵³⁾の中で、体育史研究の可能性を大胆に指摘する。体育史は専門的研究者の独壇場となるような、「事実」の克明な記述を担う特殊史ではなくて、「人間のためにどれ程柔軟な学習が歴史を育んできたかを理解させる」(リュシアン・フェーブル)のような歴史叙述を持つべきである。体育の実践家が、専門性を身につけるに従って知的世界と対立するようになるのは、「歴史研究を踏まえた認識の欠如」からくる。「アモロス、デムニー、クーベルタン、エベールをよく知ることは……決して無益ではないが、何故、これら先駆者たちの努力が実を結ばなかったのかを理解したり、……過大評価のきらいがある彼らの学説と彼らの時代、その時代の教育の暗い現実と比べることができるということが、まさに創造的である。……からだの教育が学説史、制度史あるいは思想史で満足することは、当の対象たるからだに驚嘆すべき複合体であることを忘れてのことである。……」体育の実践家は総合的な歴史に介入する可能性を持っている。「人間の行動、とりわけ情緒にかかわる行動は肉体の状態と結びついており……」(ジョルジュ・デュビー)身体行動全体が歴史の真実に迫りうる研究の対象であるとすれば、こうした全体史の叙述に、体育の実践家は高い水準で参加することが求められるであろう。

チボーは、以上のように述べて、マルク・ブロックの言葉を引用する。

「今日、われわれが余儀なく用いている遠慮がちな方法の試みよりも、もっと歴史の名に値する歴史(があるとすれば)、それは、からだの分野への勇敢な探索の中に見出されるであろう。」

(注)

- (1) Amoros については、拙著「フランスの道徳体育」(梅根梧監修「世界教育史大系」, 講談社, 第31巻, 「体育史」, 1975年, 第二章, 第四節, p. 106-122) 参照。
- (2) Amoros; Mémoire..., 1815, p. 43.
- (3) Amoros ; Idées et états..., 1821.
- (4) N. Laisné; Dictionnaire de gymnastique, Paris, 1882.
- (5) Laisné. op. cit., p. V.
- (6) Laisné. op. cit., p. X-3; 4.
もっと典型的なものとして、つぎの二つの著作を挙げることができる。
* Documents précis sur la marche de l'enseignement gymnastique depuis mon entrée du service militaire, le 29 juin 1829, au 2^e régiment du génie, jusqu'à ce jours, avec quelques notions pratiques sur l'exercice du corps aux différents âges, Paris, 1886, 103 p.
* Histoire d'une vie entière, pratiquée avec dévouement désintéressé dans l'armée, dans l'instruction publique, dans l'instruction primaire, avec quarentes années révolues de pratique dans les hôpitaux, Paris, 1895, 47 p.
- (7) E. Paz; Documents pour servir à l'histoire de la gymnastique en France, Paris, 1881.
- (8) E. Paz; La santé de l'esprit et du corps par la gymnastique, étude sur les exercices du corps, depuis les temps les plus reculés juspu'à nos jours, Paris, 1865.
- (9) Union des Sociétés de Gymnastique de France: USGF. fondée en 1873 par E. Paz. "Moniteur de la Gymnastique", 1868年12月15日, パスによって創刊. 3フラン, 8ページの月刊紙. 1874年から"Gymnaste"と改称.
- (10) E. Paz; Documents. op. cit., p. 6.
- (11) D. Mamoz; De la gymnastique en France au XIX^e siècle, Paris 1891.
- (12) J.-B.-S. Dr Hillairet; Rapport à S. Exc. M. le Ministre de l'instruction publique sur l'enseignement de la gymnastique dans les lycées, collèges, écoles normales et écoles primaires,... De

- la marche des exercices gymnastiques depuis les temps anciens jusqu'à nos jours, (Bulletin Administratif du Ministère de l'Instruction publique, Année 1869, No. 201, 12 mars 1869, P. 282-346).
- (13) K. Wassmannsdorff; Kurzer Überblick über die Entwicklung des deutschen Schulturnens von Guts Muths bis auf die neueste Zeit, Neue Jahrbücher der Turnkunst, 1855.
- (14) E. Fournier; Histoire des jouets et des jeux d'enfant, Paris, 1889.
- (15) J. Le Boulch; Esquisse d'une méthode expérimentale et rationnelle de l'éducation physique, (revue "Education Physique et Sport", 1961, No. 57, p. 27-37).
- (16) G. Vuillier; Plaisir et jeux, depuis les origines, Paris, 1900, 344 p. 279 ill. 絵画, スタンプ, オリジナル・デッサン, 水彩画などの図版を配した豪華本, 3,300部の限定出版.
- (17) J. A. J. Jusserand; Les sports et jeux d'exercices dans l'ancienne France, Paris, 1901.
- (18) P. de Coubertin; Le sport à travers les âges, ("Notes sur l'éducation publique", 1901, chap. IX, p. 127-151).
- (19) G. Ph. Tissié; L'éducation physique, Paris, 1901, p. IX-XXXII.
- (20) G. Demeny; Evolution de l'éducation physique, Ecole française, Paris, 1909.
- (21) Andry de Boisregard, Cheyne, Sabbathier, Tissot, Amar-Durivier, Jauffret, Charles Londe, Amoros, Dally père et fils, N. Laisné, Clavel, E. Paz, Pichery, E. Marey,....
- (22) G. Ph. Tissié; L'évolution de l'éducation physique en France et en Belgique, Histoire triste, Paris, 1911.
- (23) Senay, A. & R. Hervet; Monsieur de Coubertin, Paris, 1960.
- (24) COF, CNS; Encyclopédie des Sports, Paris, 1924.
- (25) G. Bourdon; Historique de l'éducation physique.
- (26) M. Bergeron; Historique de l'éducation physique, (M. Labbé éd.; Traité d'éducation physique, 2 tomes, Paris, 1930, Tome I p. 63).
- (27) K. H. von Schagen; Le rôle de l'éducation physique dans le développement de la personnalité, Paris, 1933, Thèse pour le doctorat d'université de Paris, p. 491-2.
- (28) Bureau International de Pédagogie Sportive; Mémoire Olympique, Lausanne, 1931.
- (29) Comité Olympique d'Egypte, de Grèce, de Lettonie, de Portugal, de Suède et de Suisse et du Bureau International de Pédagogie Sportive; Répertoire des Ecrits, Discours et Conférences de Pierre de Coubertin, 1933.
- (30) 「クーベルタンの事業」
1888・5・31-7・1
「学校体育調査委員会」(Comité pour la propagation des exercices physiques dans l'éducation), 委員長 Jules Simon, 60余名の委員。フランス中等教育にスポーツ普及の運動を促すことを目的とする。
1889. 6. 15-22
「体育会議」(Congrès des exercices physiques), 1889年パリ万国博の催しの一部。イギリスの教育は、アーノルドの思想に忠実か、またその成果はいかなるものかについて大規模な調査を行う。徒競走、剣術、体操、乗馬、水泳の先駆的対校競技会, 800名のリサーチ学生が参加。
1890
月刊誌「Revue Athlétique」, スポーツ界と学界との接触を目的として創刊。
1894・6・23
オリンピック競技復興のための国際会議。国際オリンピック委員会の結成。
1897
スポーツ教育会議, 発足。Felix Faure 大統領の後援により, ル・アーヴル市庁において。
1900
「フランス年刊」(Chronique de France) 創刊。前年度の各分野におけるフランス人の活躍を記載する企図。
1903
前年公刊された「実用体操」というスポーツ教育の new方式を 実践に移すために, 「実用体操委員会」(Comité de la Gymnastique utilitaire), 発会。漸時, 「大衆スポーツ協会」(Société des Sports Populaire) と改称, 戸外の芸術的催しを含むスポーツ大会を企画。
1905
「ブリュッセル会議」スポーツ技術のあらゆる問題を討議。
1906
「教育刷新協会」(Association pour la Réforme de l'enseignement), 発会。機関誌「フランス国民雑誌」(Revue Pour les Français) 創刊。
「オリンピック」(Revue Olympique) を月刊誌に切り替える。

芸術・文学・スポーツに関する諮問委員会をパリに召集，オリンピック競技プログラムに芸術，文学コンクールを加える提案。

「フランス・ルーマニア連盟」，両国親善のために発足。

1909

近代五種競技の考案。

1910

「国民教育連盟」(Ligue d'Education Nationale)，イギリスのボーイスカウトと同様のフランス斥候団(Eclaireur français)の組織化とフランス若人に，意図的かつ一般的歴史教育を広めることを目指す。

1911

「国民情宣協会」(Société de Propagande Nationale)創立。

1913

ローザンヌに「スポーツ心理学会議」(Congrès de Psychologie Sportive)結成。

1916

リヨン市で，第一回ラテン・アメリカ週間を開催。

1917-8

「ローザンヌ・オリンピック研究所」(Institut Olympique de Lausanne)設立。

1925

「万国教育連合」(Union Pédagogique Universelle)創立。

1926

「万国教育連合」，世界大会，現代都市における教育の役割を討論。

1928

「国際スポーツ教育局」(Bureau Internatinal de Pédagogie Sportive)創立。

1930

「スポーツ改革憲章」(Charte de la Réforme Sportive)草起。

⑧1 B. Gillet; Histoire du Sport, Paris, 1948, (4^e éd. 1970).

⑧2 C. Diem; Pierre de Coubertin, Olympische Erinnerungen, Berlin, 1936, zweite aufl. 1959, (大島鎌吉訳「ピエール・ド・クベルタン，オリンピックの回想」，1962年，ベースボール・マガジン社。p. 13)

⑧3 Lieut.-col. Labrosse éd. ; L'école de Joinville, 1852-1930, Paris, 1930, p. 23.

⑧4 G. Meyer; Le phénomène olympique, Paris, 1960.

⑧5 Y. P. Boulogne; Pierre de Coubertin, genèse d'une pensée, (revue "Education physique et Sport", No. 71, 1964, p. 28-31) .

⑧6 M. Th. Eyquem; Pierre de Coubertin, épopée olympique, Paris, 1966.

⑧7 J. Meynaud; Sport et politique, Paris, 1966.

⑧8 B. Gillet; Historique des Jeux Olympiques, (R. Caillois dir. ; Encyclopédie de la Pléiade, Jeux et Sports, Paris, 1967, p. 1185-1217) .

⑧9 Y. P. Boulogne; Pierre de Coubertin et le monde Anglo-Saxon, (revue "Education Physique et Sport" No. 93, 1968, p. 7-13) .

⑧0 Georges Hohrod; Roman d'un rallié, ("Nouvelle Revue", 1898) .

⑧1 P. de Coubertin; Une campagne de vingt-et-un ans, Paris, 1908.

⑧2 M. Bouet; Signification du sport, Paris, 1968.

⑧3 E. Weber; Pierre de Coubertin and the introduction of organised sport in France, ("Journal of Contemporary History", vol. 5, No. 2, 1970, p. 3-26) :

⑧4 J. Thibault; Sport et éducation physique, 1870-1970, — l'Influence du mouvement sportif sur l'évolution de l'éducation physique dans l'enseignement secondaire français, étude historique et critique, Paris, 1972.

⑧5 J. Thibault; Du dandysme au sport, (revue "Education Physique et Sport", No. 134, 1974, p. 64-66) .

⑧6 Y. P. Boulogne; Un aspect de l'oeuvre pédagogique de Pierre de Coubertin, de la gymnastique utilitaire au sport pour tous, (revue "Education Physique et Sport", No. 119, 1973, p. 11-16 ; No. 120, 1973, p. 11-17) .

⑧7 P. de Coubertin; La gymnastique utilitaire, Paris, 1906, (Tome I de l'Education des Adolescents au XX^e siècle) .

⑧8 J. Ulmann; De la gymnastique aux sports modernes, Paris, 1965.

⑧9 R. Meunier; Changements institutionnels dans l'éducation physique entre 1850 et 1914, ("Annales des ENSEPS", No. 7, 1975, p. 61-66) .

⑧0 M. Spivak; Les origines militaires de l'éducation physique en France, 1774-1848, Paris, 1972.

- 51) J. Thibault; L'oeuvre du Docteur Tissié dans l'académie de Bordeaux en faveur des jeux de plein air, (revue "Education Physique et Sport", No. 95, 1968, p. 7-12).
- 52) F. Martin et autres; Emile Jacques-Dalcroze, l'homme, le compositeur, le créateur de la Rythmique, Neuchâtel, 1965.
- 53) J. Thibault; La réflexion historique et les activités physiques et sportives, ("Annales de ENS-EPS", No. 2, p. 3-6).

(昭和51年9月30日受理)

(昭和52年3月28日分冊発行)

